

第 23 回長野県母子衛生学会 学術講演会オンライン開催に寄せて

残夏の候、Covid19 の感染対策として<三密を防ぐ>生活を初めて半年になろうとしています。

母子保健に携わる私たちは、親密さ、触れあい、非言語的なサインを読み取ることが大切にしてきましたから、<三密を防ぐ>、<Social distancing 対策>に対し少なからずジレンマを感じたのではないのでしょうか。

先が見通せない時代であっても、私たちは、心穏やかに母親がわが子を健やかに育てられるようなケアに取り組まなければなりません。第 23 回学術講演会では、国内外の母乳育児支援の水準を向上させるために日夜ご活躍中の水野克己先生をお迎えしました。また、助産師支援研修会でも妊婦の栄養や母乳育児支援を取り上げています。そして初めてオンライン配信の形で開催いたします。

この機会に、身近な方々と一緒に母子支援、母乳育児支援について活発に意見交換をしていただければ幸いです。

第 23 回 学術講演会 実行委員長 中込さと子

講師 水野克己先生のご略歴

略歴

1987 年昭和大学医学部卒、昭和大学小児科に入局

1992 年医学博士

1993～1995 年マイアミ大学 Jackson Memorial Hospital, Research Fellow

1995 年 11 月～1999 年 3 月葛飾赤十字産院小児科副部長

1999 年 4 月～2005 年 1 月千葉県こども病院新生児科医長

2005 年 4 月～昭和大学小児科助教授

2014 年 3 月～昭和大学江東豊洲病院小児内科教授

2018 年 4 月～昭和大学医学部小児科学講座 主任教授

資格

小児科専門医・指導医、周産期新生児専門医・指導医、医学博士、ICD

日本小児科学会理事、日本新生児成育医学会理事、日本周産期・新生児医学会評議員、日本母乳哺育学会理事長

Journal of Human Lactation: Editorial Review Board

International Breastfeeding Journal: Editorial Board

育児支援は女性が母親になるプロセスを支えること

昭和大学医学部小児科学講座

水野克己

少子化は加速し、出生数が100万を割った3年後には90万も割ってしまいました。子どもはどんどんマイノリティになっており、子育てを取り巻く環境は今後さらに悪くなるかもしれません。母親が子育てを楽しめるようなサポートを産科医、小児科医、助産師、保健師みんなで提供しなければ少子化の波から逃れることはできないでしょう。

私は、育児支援は、女性が母親になるプロセスを女性と医療者が二人三脚で歩むようなものと考えています。小学校低学年の担任教師は国語・算数・理科・社会・道徳・体育なんでも教えながら、愛をもって、子どもたち一人一人の個性をみながら能力を伸ばしていきます。初産の母親は“母親”としては小学校低学年と同じではないでしょうか。素晴らしい職歴を持たれている女性でも“なんでそんなことができない？”と疑問を感じてしまう母親もいらっしゃいます。今の時代、私たちは医療者として権威を示すよりも（それが必要な場合もありますが）、一緒に悩んで女性が母親へと育っていくのを見守る立場になることが必要な場合もあると思います。また、医療者は、もっと外にでて、公園、デパート、教会・若者や祖父母世代も集まる場所で子育ての話をしたいものです。子育てが身近なものになれば、周囲の人も温かい目で見守ってくれることでしょう。

スマホからいろんな情報が手に入れられるようになり、悪影響を受けている母親も少なくありません。中でも母乳育児にかかわるいろいろな論評は母親たちを悩ませます。小児科医は、母乳育児が子どもの健康にベストであるという前に、哺乳動物である人において母乳育児は biological norm であることを心しておかなければなりません。海外では“母乳育児に関する policy statement”が学会レベルでだされます。2019年7月、日本小児科学会から“早産・極低出生体重児の経腸栄養に関する提言”が出されました。これを契機に母乳バンクの活動は“小さな命のために”あると広く認識してもらえるようになりました。しかし、正期産児に対しては“母親を追い詰める”という理由もあり母乳を過度にすすめないよという風潮にあります。災害時用に困らないよにと取り入れられた液体ミルクももはや普通に外来待合室で使っている光景を見るよになりました。健康な正期産児の母乳育児は難しい状況になっているよに感じます。私たち育児支援に携わるものは“健康な”正期産児に対してどのように母乳育児を支援するのよかも真摯に取り組まなければならないよと強く感じております。

2020年は東京オリンピックが開催され、日本に世界が注目する年となるはずでしたが、新型コロナウイルス感染により世界全体が暗い年となっております。その中で子育てする母親の不安を軽減するためにも、妊娠中から子育てをサポートする・母親が望む母乳育児に寄り添う・社会にでて子どもが国の宝であることを発信する・そのような活動を始める元年にしたいよと思います。